

山口県瀬戸内海産ハモの漁獲実態

山口県水産研究センター内海研究部 國森拓也

[背景]

ハモは、山口県瀬戸内海（図1）においてきわめて重要な漁業資源です。特に小型機船底びき網漁業の主要な対象種となっており、その漁獲動向には大きな関心が寄せられています。こうした背景から、当センターではハモの漁獲実態調査を継続して実施しています。本講演では、この調査結果を中心に、山口県瀬戸内海産ハモの漁獲実態を紹介します。



図1 山口県瀬戸内海側の主要市場とハモの主漁場

[漁業の概要]

ハモは、山口県瀬戸内海側中部に位置する防府市場では主に小型機船底びき網漁業手繰第2種（底びき2種）により、東部に位置する光市場では主に底びき網漁業手繰第1種（底びき1種）、底びき2種により、その中間に位置する周南市場では主に、はもはえ縄漁業および底びき2種により水揚げされ、いずれの市場も6~9月に漁獲量が多いことがわかりました（図2）。

[漁獲量の推移]

山口県瀬戸内海産ハモの漁獲量は、農林水産統計年報によると1997年までは200トン以下でしたが、1998年から300~500トンへと顕著に増加しました（図3）。2007年以降農林水産統計の対象種から除外

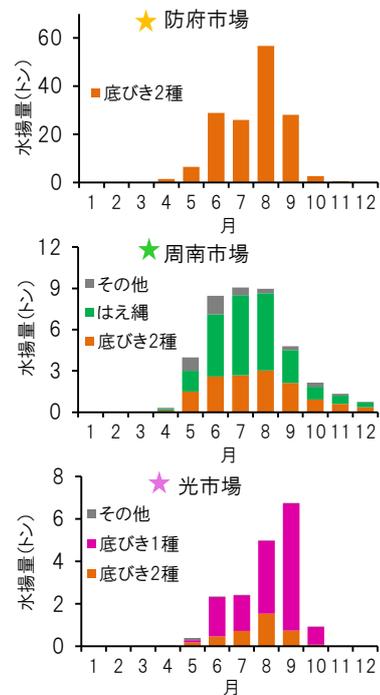


図2 主要市場の漁法と月別水揚量（2016年）

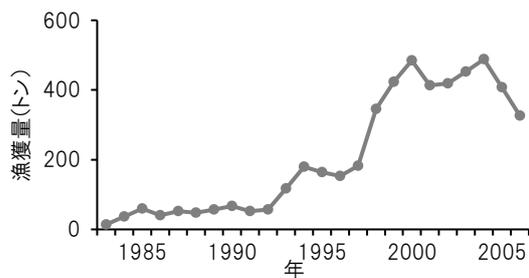


図3 山口県瀬戸内海におけるハモの漁獲量の推移

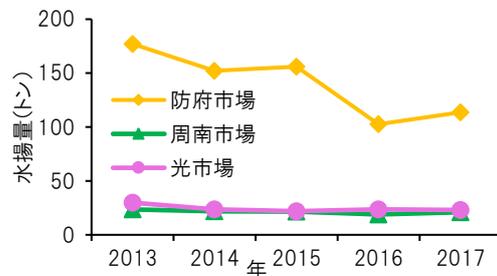


図4 近年の主要3市場のハモ漁獲量の推移（6~9月分を集計）

されたため、近年のハモの漁獲量の傾向を県内の主要3市場の6～9月期集計でみると、周南市場および光市場では横ばい傾向、防府市場で減少傾向がみられました（図4）。

[漁場]

小型底びき網漁業の標本船日誌から、6～9月の盛漁期には東部の祝島～姫島周辺の海域を中心に漁場が形成されていたことがわかりました（図1）。

[ハモの成熟・雌雄比・年齢組成]

ハモの産卵時期や年齢組成を調べるために、2016年6月から9月まで計4回、中部地区所属の小型底びき網漁船が漁獲したハモを全数買い取り、生殖腺重量、年齢組成（耳石輪紋計数による）を調べました。

生殖腺体指数（生殖腺重量/体重×100）は、雄は7月、雌は8月に最大となり、雌雄比は7月および8月には偏りが少なく、その他の時期には雄の割合が多いことがわかりました（図5）。

生殖腺体指数と雌雄比の推移および9月以降の漁獲量が少なくなること（図2）から、産卵盛期の7～8月になると雌の来遊が増えて雌雄比がほぼ等しくなり産卵が行われ、産卵後、雌が先に漁場から別の場所へ移動すると考えられました。

年齢組成は、雄では2～14歳で構成され、4～6歳（300～500g）が主体でした。雌では2～15歳で構成され、4～7歳（500～1400g）が主体でした。雌雄とも3歳以上で成熟個体が確認されたことから、6月から9月に漁獲されるハモのほとんどが産卵群であると考えられました。

[今後の課題・展望]

今年9月、主要出荷先の1つである京都市場を関係漁業者と共に視察し聞き取った話によると、最近では300～600gのハモのニーズが高く、山口県の漁業者が狙う500～700gのハモよりも高値が付きやすいとのことでした。このことから、今後は本県漁業者も従来再放流していた小型個体を狙って漁獲するようになる可能性があります。漁獲量の減少傾向が見え始めた現状において、産卵群に加えて、このような小型個体の漁獲が及ぼす影響をハモ資源の持続的利用と漁業所得の向上の両方から検討することが必要と考えられます。

[参考文献]

- 1) 村田実. 2017. 山口県瀬戸内海産ハモの漁獲実態, 山口県水産研究センター研究報告, 14, 27-43.
- 2) 農林水産省中四国農政局統計部. 1985-2008. 農林水産統計年報.

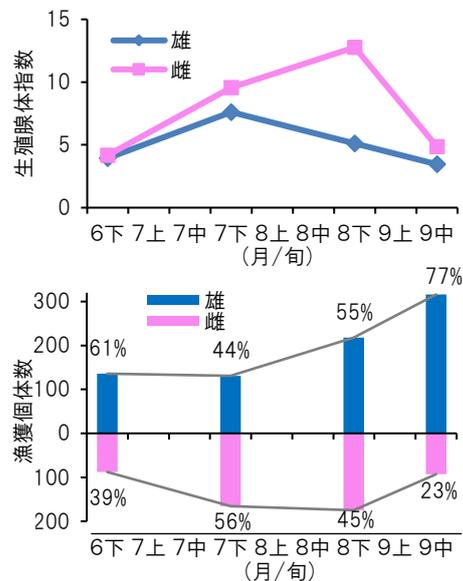


図5 6～9月の旬別の生殖腺体指数(上)および雌雄別個体数(下, 数字は雌雄の割合(%))